

## 第196回ギャラリー展



196回ギャラリー展は日本画誇る伊万里陶磁器から小型の皿を中心に古伊万里・有田・鍋島の16点展示いたします。

日本で磁器が本格的に焼かれるようになったのは、今から約400年前の豊臣秀吉の朝鮮出兵後の有田が最初だといわれています。

秀吉の命令により鍋島直茂は多くの陶工を連れて帰り、有田の「泉山」で磁器の原料を発見し、窯を築いて磁器を焼いたとされています。さらに、伊万里川河口付近から積み出されたので「伊万里焼」と呼ばれるようになりました。

一方、江戸時代、佐賀鍋島藩が大川内山にあった藩直営の御用窯で焼かせたものが「鍋島焼」です。色鍋島・鍋島染付・鍋島青磁などがあります。

鍋島焼きは将軍家への献上品、大名などへの贈答品として、およそ200年間、藩直営の窯で作り続けられました。

高い技術と厳しい管理の下に、利益は考えずに作られたので、世界に誇ることのできる価値の高いすぐれた作品が多いのです。

明治4年廃藩置県で鍋島藩窯はなくなりましたが、大川内山の人々は鍋

島焼きの伝統を受け継ぎ、新しい伊万里焼として発展させ現在にいたっています。

400年を生き続けた陶磁器から何かを感じ取っていただければ幸いです。

第196回ギャラリー展

古伊万里・有田・鍋島  
磁器 皿 展

平成25年7月16日～8月16日